

TZFKS

散
version
陽

どうして

書いちゃったんだろ

こんな小説。

「読んだよ」と常夏くんはいった。

「うん」とわたしはいった。

それ以来。ひとこともことばを交わしてない。

当たり前だ。

と思う。

こんな。あてつけみたいな小説。

ま。残業続きでろくに顔も合わせられてないのもあるけど。それにしても……。

ノートパソコンを閉じてトーストをかじる。味がしない。味はする。けど。他人が味わってるのを横から見てるみたいな味だ。ノートパソコンをひらく。

怒ってるわけじゃない。と言いたい。常夏くんに。けど。信じられないと思う。自分だったら信じられない。怒り散らして当たり前散らすと思う。

でも。ほんとうに常夏くんには感謝してる。これまで付き合ってくれて。小説交換。これはほんとうにほんとうの気持ち。って。こんなことパソコンに打ったってしかたない。

直接いわないと。常夏くんに。でも。わたしはこわい。

わたしの好きなひとつで常夏くんだけだよ。

そりやそうだよ。

そのはずだよ。

うん。

左手のリングを撫でる。つるつるしてる。常夏くん以外に好きになったひとなんていない。や。そりや。幼稚園の頃とか小学生の頃にはあったかもしれないけど。おぼえてないし。そんなのぜんぶぶつとばすくらい。小学3年生のころから常夏くんはわたしのヒーローだった。はず。なのに。

真言なんてひと。聞いたこともない。のに。

なんでこんなものを書いたの。書けたの。

わからない。

これが例えばポストに投函された差出人不明の手紙だったら。よっぽど思い込みのはげしいストーリーカーってことで片付く。と思う。わたしにストーリーカーって。その時点で正気を

疑うけど。ストーリーカーはもともと正気じゃない。から大丈夫。大丈夫ってなんだ。でも。これを書いたのはわたし。

どんな気持ちで書いてたのか思い出せない。熱病に浮かされるように、悪夢を見るように書いたような気もする。幸福な気持ちでさらさらと書いた気もする。いちばん実感にあってるのは。この小説をWEBに公開した瞬間のノートパソコンのまえにわたしが生成された。ってこと。わたしが生まれた。ってこと。でも。それじゃ。まるで。

わたしは馬鹿なことを考えてる。

あんまり馬鹿だから。ここには書けない。書く気にならない。書くっていうのは。たとえパソコンでだって。とくべつな行為だ。呪いみたいなもの。書いた瞬間。わたしは馬鹿になる。そういうものだ。

だから書けない。

でもこの馬鹿な考えを消化しないと。わたしは常夏くんに顔向けできない。顔向けできないってなんだ。そうじゃなくて。物理的に。顔向けできない。だから顔向けできないってなんだ。顔を見れない。それは。いやだ。常夏くん。イケメンだし。

あーもう。

わたしはアホだ。

*

きゅっ。と靴ひもを結ぶ。常夏くん。

「きょう飲み会だから遅くなる」

わたしがうしろに立った瞬間、まるで赤外線センサーで感知したかのように自動的にことばを放つ。常夏くん。

「ん？」

なにも応えないわたしに不審を感じて、ふり返る。常夏くん。

「どした？」

「あの」

「うん」

「わたし。怒ってないから」

目を丸くして固まる。「……えーと。あの……………」

「だからそういうんじゃないかって。ほんとに怒ってないってことをまず言っておきたかったの」

「あ。そか。うん。よかった」よかったって。なにが？　と言いそうになって、ちがうちがう、それは怒ってるときのモードだ。とあわてて修正する。した瞬間。「や。よかった。っていうか。あの……………」うん。あ……………」汗をかく。常夏くん。

「ねえ……………」そんなにわたし。こわい？」

「や。噛むじゃん。襟撫」

「……………」わかってない。噛むときは許してるときなのに。ま。いいや。それはいま関係ない。「あの。小説交換」

「ああ」ようやく思い当るところがあって安心した声を出す。常夏くん。「ごめん。書けなかった。仕事忙しくて」

「いい。それは。てかわたしは2回落としてるし」
常夏くとわたしで交互に書いてた小説。常夏くんはこのまえ1回落として。わたしは2回落としてる。

「それで？」やさしく促す。常夏くん。のこえ。

「う。あの。読んだんだよね。『TZFKS』」

「うん。読んだよ」

「で。さ」あ。やば。ことば考えてなかった。どう聞こかな。えーと。「なんか。知ってたたりしない？　真言。ってひとのこと」

もし。

あの話が本当なら。

ってちよつと馬鹿げてるけど。いい。

もしかしたら比喻なのかもしれない。むかし。わたしをいのちがけで救っただれかがいて。常夏くんはその人のぶんまでわたしを愛してくれてるのかもしれない。わたしは忘れてるのかもしれない。だったら。

わたしは忘れたままでいたくない。

たとえわたしと常夏くんのあいだにそのひとが入ってすこしぎくしゃくすることになったとしても。わたしと常夏くんのあいだに不誠実が挟まったままなにこともなく過ぎ去

るよりはマシだと思う。

そう考えて。改めて。これまでわたしと常夏くんが書いた小説のことを思い出してみた。すると。男性が主人公の場合には大抵——ぜんぶではないけど——恋敵とか、敵がいた。現実の常夏くんにはわたしをとりあうライバルなんていなかったにもかかわらず。もちろん小説が現実のわたしたちの恋愛を反映する必要なんてまったくない。一切。けど。すこし。気になった。だから。馬鹿でもいい。聞く。

常夏くんはせっかく結んだ靴ひもをゆるめて靴を脱ぐ。立ち上がり。身体ごとふり返ってわたしに正対する。ごっん。いたい。おでこをくつつける。それからわたしの肩にあごをのせた常夏くんのいまにも泣きそうな声が耳元で響いた。

「おれえ。いまあものすごくしあわせだあ」

え

「え？」

「よかったよう。ほんとに。ああ。もしかしてって。思ってたんだ。でも。おれ。言っただけなあ？ こどものなまえ。真言にしたい。って。さあ」

「え？ え？ なに？」は？「話が見えない」抱きつく常夏くんの肩を掴んで自分の前にもってくる。「どゆこと？」

「え？ どゆことって。ん？ 話が見えないって、話が見えない。ん？ なんの話？」

「や。こっちの台詞よ」

「妊娠したんでしょ？」

はああああああ？？？？

「いや。あの。なにをどうしたらそういう話になんのよ」

「あれ。ちがった？」

「ちがった」

「……なんだよおおおお。マジかあ。うおおお。マジかあ……」

「あの。勝手に期待して勝手にガツカリしないでくれる」

「う。ごめん」

「いいけど。説明して。どういう経緯？ 全っ然意味わかんないんだけど」

「や。あのさ。『TZFKS』読んで……あーでも。じゃあ。ちがうのか……？」

「いいから。いつて」

「ん。あれってさ。エディプス的な話っしょ？ ちがう？」

「ん？」

「だから俺でつきり「お前がパパになるんだよ！」ってことなのかな。って。ドキドキしながら読んだんだけど。あれ。そうならんかな」

「まって……なるかも。いってみて」

「つまりあの物語の主人公・真言にとつて常夏つまり俺は父に、襟撫は母にあたるのか
なつて。とすると《倫理化》^{エチカ}ってのは「近親相姦の禁止」^{インセスト・タブー}になるわけじゃん？ それを破
る《淫靡化》^{エッチカ}以降は祝祭空間……ってのはちよつと俺くわしくないからわからんけど。そ
の中で俺たちのペンネームも出てきて、想像的に父殺しと母犯しが成し遂げられる。常夏
が真言に「卵子はお前がもつべき」っていうのも。つまり」

「卵子を得て生まれるのはお前だ。」と

「そう。かな？ って。それにさ。そう思ってこれまでの俺たちの小説読み返してみ
ると、男性が主人公の場合には大抵——ぜんぶではないけど——恋敵とか、敵がいたんだよ。
それってつまり父なのかな。って」

「んー」

そっか

そう

読んだのか。このひとは。

「ちがった？」

「わたしのつもりとは。ちがった。けど。解釈に間違いなんてないし。それに」
それに

なんというか。

うれしかった。

でも。そんなことは言えないから。言う。

「ほんとうに。へんなひとだな。君は」

「あ」

「ん？」

「いま。中学の頃の襟撫っぼかった」

べたっ。常夏くんの顔に手の平を押しつける。「思い出すな。イタかった頃のわたしを」

「えーなんで。あの襟撫も好きだったな。俺」

「うるさい。はよ出なさい」

常夏くんが靴ひもをもういつかいきゅつ。と結びながら言う。「あ。いまの韻？」
「うるさい」

常夏くんが立ち上がって右手をあげる。

「じゃ。いってきます」

「ん。いってらっしゃい」

光のなかへ常夏くんが吸い込まれていって。扉が閉じる。
まったく。

*

で。さ。

ちよつと。気になって。買ってみた。妊娠検査薬。したら。

バッチリ。

出た。

「つつつしゃあああああ！！！！」って。知らせた常夏くんからメールの返信。

まったくさ。アホだよ。わたしたち。

問題はまったく解決してない。うやむやになったまま。

常夏くんの説は解釈としてはアリだけど。わたしがそういうつもりで書いたって事実はない。知らなかったし。こどもができたなんて。じゃあ。なんでわたしはあんな小説を書いたのか。書けたのか。あんな発想。どこから出てきたのか。わからない。じゃあもうひとつの仮説は？ わからない。

仮説は仮説のまま。実証も反証もされない。

それで。いい。かなって。

もういちど読み直してみた。

『TZFKS』

いやな気分はしなかった。

だからいま。口にしてみる。

「まこと」

目の奥だけ局所的な地震に晒されてるみたい。へんな感覚。

「ありがとう」

そう言ってみた瞬間。涙がこぼれて。とまらなくなった。名前を呼ぶたび。ありがとう
って、言うたび。ああ。なんで。なんで。ま。まえがみえねえ。あはは。あじやじやじ
やじやじやじや。

涙がとまらないまま。笑いながら。なんどもなんども。言い続けた。

「ありがとう。まこと」